

【請益】 南泉の某甲不會と云ふたに、下語して不風流一處也風流と云ふは意旨如何。答ふ。句の心は根本の上には會すると云ふことも、會せずと云ふこともなきほどに、一死更不活一と落したれども、南泉の上を資けて根本の道理を知らば不風流一處也風流と云ふ義なり。

第三節 本則評唱和譯

這裏に到つて即心不即心を消せず、非心不非心を消せず。直下に頂より足に至るまで、眉毛一莖も也た無うして、猶些子に較れり。即心非心を壽禪師は表詮遮詮と謂ふ、此れ是の涅槃和尚は法正禪師なり。昔時百丈に在つて西堂と作り、田を開きて大義を説くものなり。是の時南泉已に馬祖に了る。只是れ諸方に往いて決擇す。百丈此の一間を致す。也た大ひに酬ひ難し。云く從上の諸聖還つて人の爲めに説かざる底の法ありやと。若し是れ山僧ならば、耳を掩ふて出て、這の老漢一場の懺懺を看ん。若し是れ作家ならば他の恁麼に問ふを看て便ち他を識破得せん。南泉只他の所見に據つて便ち有と云ふ。也た是れ孟八郎なり。百丈便ち錯を將つて錯に就ひて後に隨つて道ふ。作麼生が是れ人の爲めに説かざる底の法と。泉云く、不是心不是佛不是物と。這の漢天上の月を貪り觀て掌中の珠を失却す。丈云く説了也。可惜許他のために注破す。當時但劈頭に便ち棒して他をして痛痒を知らしめん。然も是くの如くなりと雖も、備且らく道へ什麼の處か是れ説

處。南泉の見處に據らば不是心不是佛不是物、曾つて説着せず、且らく你諸人に問ふ、什麼に因つてか却つて道ふ説了也と。他の語下に又蹤跡なし。若し他不説と道は、百丈什麼としてか却つて恁麼に道ふ、南泉は是れ變通底の人と、便ち後に隨つて一拶して云く、某甲は只恁麼和尚又作麼生と。若し是れ別人ならば。未だ免れず分疎不下なることを。爭奈せん百丈は是れ作家、答處妨げず奇特なることを。便ち道ふ我れ又是れ大善知識にあらず争でか説不説有ることを知んと。南泉便ち箇の不會と道ふ。是れ渠果して會し來つて不會と道ふか、是れ真箇不會なることと莫しと。百丈云く、我れ太煞懶がために説き了れり。且らく道へ什麼の處か是れ説處。若し之れ泥團を弄する漢ならん時は、兩箇泥々洒々。若し是れ二り俱に作家ならん時は明鏡の臺にあたるが如し、其實前頭は二り俱に作家、後頭は二り俱に放過。若し是れ具眼の漢ならば、分明に驗取せん。且らく道へ作麼生か他を驗せん。雪竇の頌出するを看よ。

【字解】 一。這裏に到りて等。人の爲めに説かざる底の道義に至りては、即心不即心もいらぬこと、非心不非心もいらぬこと。苟も言詮に渉る以上は、一切皆第二第三である。

二。壽禪師之れを表詮遮詮と云ふ。杭州慧日永明延壽智覺禪師は天台德韶の法を嗣いだ人で、有名なる宗鏡錄一百卷の著者である。宗鏡錄第二十五に、問ふ如上所説の即心即佛の旨、西天此土の祖佛同じく詮じて理事分明なること眼を同じくして見るが如し。云何ぞ又非心非佛と説くや。答ふ即心即佛は是れ其の表詮なり。直ちに其の事を表示して親しく自心を證して了了として見性せしむ。非心非佛の若きは其れ遮詮なり。即ち過を諱し非を遮し疑を去り執を破して情見を奪

下す。依通意解して妄りに之れを認むる者の心佛俱に不可得なるを以ての故に是を以て非心非佛と云ふと申してある。
 三。涅槃和尚。先きも申した通り南泉と問答するは、馬祖の法嗣百丈の惟政禪師である。それを圓悟集主が涅槃和尚を法正禪師としたは古本の傳燈傳所載によつたものであるか恐らくは誤りであらう。けれども惟政にもせよ法正にもせよ、何れにても可。人に用事はないのである。
 四。西堂。西は賓位であるから他山の前住の人が来た時は賓客の西堂に拜招するが法則である。
 五。田を開いて大義を説く者也。傳燈錄に法正禪師一日衆に謂つて曰く、汝等我がために田を開き了れ、我汝がために大義を説かん。僧田を開き了りて歸つて師の大義を説かんことを請ふ。師乃ち兩手を展開すと見へて居る。
 六。是れ渠果して會し來つて不會と道ふか。會と云ふも第二第三。不會と云ふも第二第三。畢竟言語思慮を絶して居るのである。
 七。派々活々。鶻々突々と普通で濁亂とか汚穢とか云ふも同じことである。涅槃も南泉も元共に沒曉漢であつて亂りがはしき埒もない馬鹿者よと云ふのである。

第四節 頌

祖佛從來不爲人各自守疆界。有條攀條。記得。禪僧今古競頭走。踏破草鞋拗折。
 明鏡當臺列像殊鏡來與爾相見。一。一面南看北斗。還見老僧騎佛殿出山門。塵。
 鼓斗柄垂落處也。不知。無處討。地。樣。子。成。七。八。片。拈得鼻孔。失却口。道那裏息。
 來。果然恁。

【讀方】

祖佛從來人の爲にせず。各自に疆界を守る。條あれば條を攀づ。箇の元字脚を記得して心に在れば地獄に入ること箇の如くならん。禪僧今古頭を競ふて走る。草鞋を踏破し拄杖を拗折して高く鉢盂を掛けよ。明鏡臺に當つて列像殊なり。塵也破也。鏡を打破し來れ爾と相見せん。一。一面に面して北斗を見る。還つて老僧が佛殿に騎つて山門を出づるを見るや。新羅國裡に上堂すれば大唐國裡に未だ鼓を打たず。斗柄垂る。落處も也た知らず。什の處にか在る。討ぬるに處なし。可惜許。椀子地に落ちて椀子七八片。鼻孔を拈得し口を失却す。那裏より這の消息を得來る。果然として恁麼。便ち打す。

【字解】

一。各自に疆界を守る。汝は汝たり。一切諸法皆其の位に在つて尊し。眼は以て色を看、耳は以て聲を聞く。我が口で食することを知り、他人の鼻孔を借らざることを知れ。佛祖の御厄介にならぬのが獨立自尊の本義である。
 二。條あれば條を攀づ。判官が罪を斷ずるには法律規則のよるべきものあれば必ず其の正條によることであるが、佛祖も亦同じことで人の爲めにせず。と云ふ正條を嚴守せられることである。
 三。箇の元字脚を記得して心に在れば地獄に入ること箇の如くならん。此語は類則として仔細に參究することである。元字脚と云ふに付ては古來種々の辨を附けることなるが、分り易い説を云へば、元の字の脚は乙の字であるから乙一音通で同じであるから、元字脚を記得して心に在くと云へば、一字で文字注脚を記憶して心頭に置くと云ふことである。そこで若し吾々にして一字でも文字などを記憶して居つて彼れの此れのと理窟を考へて居るやうなことであつたならば、ソレはハヤ地獄の業因を作つたと申すもの、況して兎や角餘計な分別をすれば是れ徒らに葛藤を弄するものであるから、誹謗正法の大罪で地獄に入ること箇の如くであるぞと云ふのである。私に案ずるに元字脚と云ふ元は、元は始也と云ひ又公羊傳の註に一を變じて元となす、元は氣也、又正月一日を元日と云ふと云ふてあるが、此註が宜しいと思ふ。即ち一は數の始めなり又物の極なりで、總べての文字は此の一と云ふ字を字脚にしモトにして出來たものである。そこで元字脚記得してと云へば一と云ふ文

字でも念頭に置き心に記憶して居ればと云ふ程のことになる此説は私に設けたものであるから。先輩識者の批評を得たいと思ふ。

四。草鞋を踏破し拄杖を拗折して高く鉢盂を掛けよ。迂路々々したとて只草鞋を踏み破る計りであるから、むしろ拄杖をへし折り鉢盂をまいて歩一步自家に退歩して見た方が宜しいと云ふたものである。

五。墮也破也。雪竇は明鏡に當りてと云はれるが、此れが亦くせ物であるから。ヤハリ其の鏡を敲き墜して打ち破つてしうまたが宜からうと云ふ。

六。鏡を打破し來れ爾と相見せん。お互ひに鏡に執着して居るやうなことではいかぬから鏡を打破し一切を除却してさうして始めて相見を許されることであらう。

七。還つて老僧が佛殿に騎つて山門を出づるを見るや。雪竇は南に面して北斗を見ると云はれるが、之れも一時の興で面白くことであるけれども山僧は一層のこと金鳥に跨がり玉兔を伴にして唐天竺を見物しやうと思ふと云ふ。

八。新羅國裡に上堂すれば大唐國裡に未だ鼓を打たず。嵯峨天皇の皇后であらせられた檀林皇后の投機歌に、もろこしの山のあなたに立つ雲はこゝにたく火の煙なりけり申すお歌がある。前の佛殿に騎りて山門を出づと云ふは大小の分量を打破して申したものであるが、爰は遠近の分別を斷滅したもので又曾つて云い來たと云ふ言葉があるから古今とか過現とか云ふ時間の料簡をも放棄した上を申したもので到底言語文句に拘はれて居る人たちには會得の出來ないところである。

九。落處も也た知らず。雪竇は斗柄垂るなど申されるが、其やうなものがどこへブラ下つて居るかの、花と咲き月と照り風と吹き雨と降る。そこへ北斗がブラ下つて居るのが見へないのかと重ねて云ふ。

一〇。什麼の處にか在る。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す、明歷々露堂々。然も捉へんとするに早や蹤跡なし、諸人之れ什麼の故ぞ。

一一。瞎。討めるに處なしとは借々氣の毒なことである。

一二。可憐許。惜しいこと残念なことである。

一三。椀子地に落ちて椀子七八片となる。椀子は椀の下へ敷く木皿のことである。椀が地に落ちたとて落ちもせぬ椀子が七八片になるわけはないが、今は差別を泯絶したところであるから討めるも處なしと云ふが、いや確かに討れたのであるが不説か則ち爲人の極處であると云ふ妙味である。古語に盡子地に落ちて椀子七片となると申してあるも。之れも同じことである。人あり曰く。諸人側へ響いたば。何んと。討れば彌々失ふぞよと。

一四。那裏よりか道の消息を得來る。雪竇は鼻孔を拈得し口を失却すしたと云はれるが、これ何處からの消息であるか、口と鼻とを取り差へたなどい。廣い世の中にはそんな珍らしいこともあるかナと云ふ。

一五。果然として恁麼。雪竇の申される通り、いづれ結局は其の様なことであらふと思ふたが、テツキリさうであつたと云ひもあへず。

一六。便ち打す。ヒツシヤリ打つて、ナニ諸人心配するな、依然口は鼻の下にあるぞよと云ふ。

【講義】 祖佛從來人の爲めにせず。三世の諸佛も歴代の祖師も、本より衆生濟度など云ふことがあべきがない、迷なく、悟なく、生なく佛なく、本來本法性天然自性身で度すべき衆生もなければ悟るべき菩提もない。其れを色々に生の佛のと云ふのは、全く夢中に夢を見て居るからのものである。諸佛の説法と云ふと何づれば小兒の啼を止めんが爲めなり、ほんの小兒だまに過ぎないのである。衲僧今古頭を競ふて走る。佛祖の大道は本來不爲人で、佛は佛、衆生は衆生と、各々自分で自分を始末すべきもの、我が口で飯を食するすべを知り、他の鼻孔を借らざることを知るまであるに古往今來衲僧とも云はれる立派な和向たちが、佛を求め法を求めて東奔西走日も是れタマならざ

る有様とは如何にも氣の毒なことである。佛に問ひ祖に尋ねてなに、するぞ。佛は佛、祖は祖、我れは我れであつて本來人人箇々圓成の唯我獨尊である。それを己れに迷つて向上を問ひ向下を問ふとは、サテモ迂路たへたことで實に見苦しいとも無様なとも何とも云ふて見やうのないことである。明鏡臺に當りて殊像異なり。今南泉と涅槃との兩老が、眞實佛祖不爲人不説底の明燈たる鏡に對したる時の相を眺めて見ると南泉には南泉の眉毛があり、涅槃には涅槃の鼻孔があつて大光明中に列像殊別である。抑も宇宙の萬象は一皆全眞でありて柳は柳の緑りのまゝ、花は花の紅のまゝ、山は山の高いがまゝ、河は河の長いがまゝ、水は水の清いがまゝ、月は月の丸いがまゝ、一切皆獨立自尊で少しも佛祖の力をかつたり他人の御厄介にはなつては居らぬのである。一一南に向つて北斗を見る。北に向つて北斗を見るのならば誰れにでも見へるであらうが何んと諸人南に向つて北斗が見えるであらうかどうであらう。肉眼はサテ置き天眼でも慧眼でも法眼でも佛眼でも結局見ることが出来ないであらうが。山僧は金鳥に馭し玉兔を伴にして唐天竺を見物しやうと思ふが諸人はどうか。ナニ思慮分別では及ばぬとな。コハ何としたこと。其れそこが不爲人の爲人で不説法の説法である。目明いて看、耳あらば聞け。一一南に向つて北斗を見る。ドツチ向ひても見はづしはない筈であるぞと云ふ。斗柄垂る討ぬるに處なし。其れそこに北斗がブラ下つて居るではないか。花と笑み鳥と歌ひ、月と照り紅葉と散る。然るにそれが見えぬとはどうした

ものであらう。向上の一隻眼を開ひて見よ。桃梅櫻李一時に開き、雪月花鳥一時に來つて何ともハヤ面白いことであり楽しいことである。天地用ふれども盡きず。畢竟之れ一生受用不盡底。大光明裡の千影萬像であつて列像殊別の趣きであるぞ。鏡の面には花も月も明歷々と現成して居るけれどそれを捉へやうとすれば、ハヤ没蹤跡で討ぬる處もないことである。鼻孔を拈得して口を失却す、これがそれ不會の會不説の説である、櫻右手に桃左手に。櫻見んとすりや桃が泣くと云ふが、お互に三面六臂、千手千眼底の妙用を具へて居るであらうかどうであらう。若し具せずんば、一方に我又大善知識にあらず争かでか説不説あることを知らんやと云へば一方にそれに對して某甲不會と挨拶する底の間答商量を參得して見よ。そこで始めて佛祖不爲人不説底の妙意を味ひ得ることであらふぞと云ふ。

第五節 頌評唱和譯

釋迦老子出世して四十九年未だ嘗つて一字を説かず、始め光耀土より終り跋提河に至るまで、是の二中間に於ひて未だ嘗つて一字を説かずと。恁麼に道ふ、且らく道へ是れ説か是れ不説か。如今龍宮に満ち海藏に盈つ、且らく作麼生か是れ不説。豈に見ずや修山主道く、諸佛出世せず、四十九年の説。達磨西來せず。少林に妙訣有り。又道く。諸佛曾つて出世せず。亦一法の人に與

ふるなし。但能く衆生の心を觀て、機に隨ひ病に應じて藥を與へ方を施さず。遂に三乘十二分教あり。其の實は祖佛古より今に至るまで曾つて人の爲めに説かず。只這の不爲人正に好し參詳するに。山僧常に説く、若し是れ一句を添へて甜蜜々地なるも、好々に觀來れば正に是れ毒藥なりと、若し是れ劈脊に便ち棒し、口に便ち擱して、推し將ち出で去らば、方に始めて親切の爲人ならん。衲僧今古頭を競ふて走る。到處に是も也た問ひ、不是も也た問ひ、佛を問ひ祖を問ひ向上を問ひ向下を問ふ。然も此くの如しと雖も、若し未だ這の田地に到らず。也た少くことを得ず、明鏡臺に當つて列像殊なりと云ふが如くんば、只一句を消して明白を辨すべし。古人道く。萬象及び森羅一法の所印なりと。又道く。森羅及び萬象、總に箇中に在りて圓なりと。神秀大師云く。身は是れ菩提樹心は明鏡臺の如し。時々勤めて拂拭せよ。塵埃を惹かしむること勿れと。大滿云く。他只門外に在りと、雪竇恁麼に道ふ、且らく道へ、門内に在るか門外に在るか。爾等諸人各一面の古鏡あり、森羅萬象、長短方圓、一中に於ひて顯現す。爾若し長短の處に去つて會せば、卒ひに模索不着ならん。所以に雪竇道く、明鏡臺に當つて列像殊なりと。却つて須らく是れ一一南に面して北斗を見るべし。既に是れ南に面す。什麼としてか却つて北斗を見る。若恁麼に會得せば方に百丈南泉相見の處を見ん。此の兩句は百丈挨拶の處を頌す。丈云く。我れ又是れ大善知識にあらす争か説不説有ることを知んと。雪竇此に到つて頌し得て死水裏に落在す。人の錯會せ

んことを恐れて却つて自ら提起して云く。即今目前斗柄垂る。爾更に什麼の處にか去つて討んと。爾纔かに鼻孔を拈得せば口を失却し、口を拈得せば鼻孔を失却し了らんなり。

【字解】一。光耀土。釋迦老子成道第二七日にして菩提樹下を動せずして然も光耀土普光明殿に在りて大方廣佛華嚴經を説き給ふ。之れ乃ち教家に云ふ處の根本法輪であつて如來説法の始めである。跋提河は即ち阿特多伐底河のことで拘尸耶揭羅城の西北十餘町の處にありて、釋尊入滅の場所沙羅林は其西岸であると云ふことで爰が涅槃經や遺教經を説かれた處である。種伽經には。我れ某夜最正覺を得てより乃至某夜歸涅槃に入るまで其の中間に於ひて乃至一字を説かず。亦已説當説せず。不説是れ佛説なりと申してある。

二。如今龍宮に滿つ。婆娑界所傳の五千四十餘卷は、龍宮秘在の百分千分の一にも及ばぬと云ふことであるが、彼の龍樹菩薩はその龍宮の大藏經悉く披見せられたと云ふことである。

三。修山主道く。杭州龍濟の紹修禪師と申して地藏桂琛の法を嗣いだ方であるが、此の人が釋迦老子出世已前に早や四十九年の説法を了し。祖師の西來を待たずして少林に妙訣があると云ふことを申されたことである。

四。機に隨ひ病に應じて藥を與へ方を施す。病は元より因緣所生のものであるから縁がつくれば自づと即ち快癒する筈である。迷も亦その通りであるから、病氣が全快すればもはや藥の必要はなきが如く。迷ひが盡れば迷もなく悟もなく又修もなく證もなく隨つて佛の衆生のと云ふことはないのである。

五。正に好し參詳するに。不爲人不説法の處はお互に是非とも諸人參究して見なければならぬ。

六。古人道く。法句經の文を引いたのである。

七。神秀大師。震旦佛心宗の第五祖弘忍大師の上足であつて。此の人が即ち此宗のお祖師様である。

八。大滿。震旦佛心宗の第五祖弘忍大師と申した人で大滿禪師の號は代宗皇帝より賜つたものである。唐の上元二年壽七十有四で以つて示寂せられた。師の門下に慧能神秀の二上足がありて、之れより禪に南頓北漸の區別が出来たのであ

九。各々一面の古鏡あり。これは自己一面の古鏡は従本以來磨ぐことも琢ぐこともなければ、本來明晃々として一點の曇りもなく佛來れば佛を現じ祖來れば祖を現じ鬼來れば鬼を現はして萬象森羅一物として現せざるものはない。それであるからお互に佛の法のと外方に向つて捜しまはる必要はないので人人各に内に反省して看たならば。這箇本來箇々圓成底の明鏡が煌々として光を放つて居ることがわかるのである。

第六節 類則提唱

其一 元字脚

趙州云。記_{シテ}得_{シテ}箇_ノ元_ノ字_ヲ脚_ニ在_ル心_ニ入_リ地_ニ獄_ニ如_シ箭_ヲ射_ル下_ノ語_ニ云。耳_ノ朶_ノ兩_ノ片_ノ皮_ニ也。

元字脚とは元の字の様に前脚を踏みなるとしたが好ひなど、思ふて一路に定まらざる心を胸に置けば、地獄に入ること箭を射るが如しと云ふぞ。又艸の光の字の様に元の字を書くものを悪しく心得へて錯つたと云ふ事ぞ。似て似ざることなり。下語に耳朶兩片皮也と置ひて也の一字で截斷を備ふるぞ。色相の上を截斷して也と云ふ字を用ふるなり。又爲_ニ他_ノ閑_ノ事_ノ長_ニ無_ニ明_ニ他_ノ字_ノ眼_ノ目_ノぞ。先師に下語あり云く截斷紅塵水一溪。拶して云く意旨如何。耳朶兩片皮也。色相を色相と見るが即ち截斷なり。耳朶兩片皮と云ふ句、色相の句なれども、也の字を添へて用ふる時は截斷の句となる。也の字を咎めて截斷に用ゆるなり。元字脚をば妄念妄想と心得べき也。

其二 一字不説

世尊出世四十九年未_レ曾_レ説_カ一字不_レ説。下語云。不_レ知_ニ何_ノ處_ノ寺_ノ風_ノ送_ニ鐘_ノ聲_ノ來_ル。鐘_ノ作_レ鐘_ノ鳴_リ鼓_ノ作_レ鼓_ノ響_リ。

説法と云ふことも、根本無心の者が説法した程に、落居ないと云ふ處を用いて一字不説と云ふ。句の心は説法したも自然の道理ちやと云ふ方ぞ。拶して云く。四十九年間説法をしておひて一字不説と云ふたは、何んと云ふことを辨せよ。云く。身口意と云ふて身に三過あり、口に四過あり、意に三過あり。是れを十惡と云ふ。口に四過ありとは、綺語、妄語、惡口、兩舌、是四を口業と云ふ。綺語と云ふは、詞に華を咲かせて心に思はざることと云ふを云ひ。妄語と云ふは、虚言を人に云ひつけなどして悪し様なるを妄語と云い。惡口と云ふは、人を叱り人を憎み、常に我瞞(慢歎)情識なるを惡口と云ひ。兩舌と云ふは、是非を分別して、善惡を此舌の囁りにて善をも云ひ、惡をも云ふを兩舌と云ふ也。此身口意の十惡の道理を知りて口業を免れた處が即ち不説の道理なり。

其三 妙訣

修山主云。諸佛不出世。四十九年說。達磨不西來。少林有妙訣。下語云。百花爲誰開。

四十九年の説と云ひ妙訣と云ふも大乘の法を云ふぞ。大乘の法と云ふは佛法の事ぞ。世尊四十九年の間説法せられたれど。本來佛法と云ふこと、世尊の始めてせられたものでないぞ。過去空劫際より彌綸してあることぞ。達磨の西來せぬ先にも妙訣はあるぞ。釋迦達磨の初めてせられねども、佛法と云ふことはあるぞと云ふ處を、修山主がよく見極めて云はれたなり。此句は爲人の方にも用ふれども、こゝでは現成の落居什麼の道理も無いと云ふ方なり。妙訣は奇特の事也。

又云く。出世せう者が無いと見た處こそ四十九年の説法よ。西來せうものが無いとみたことぞ、少林の妙訣は。此語は面は現成ぞ。底は爲人あり。百花春到は現成ぞ。爲誰開と云ふが言葉に就いて爲人したぞ。先師云く。爲人と云ふにも色々あり。和盤推出夜光珠など、云ふは本分をキラリと呼出して爲人したぞ。夜光珠が本分ぞ。又爲誰開と云ふは體を呼出しはせいで、言葉に就いて爲人したぞ。同じ爲人なれども體用あるぞ。又妙訣とは奥意と云ふ心ぞ。密旨秘曲などの心ぞ。

第二十九則 大隋劫火

第一節 垂示

垂示云。魚行水濁。鳥飛毛落。明辨主賓。洞分縑素。直似當臺。明鏡。掌内明珠。漢現胡來。聲彰色顯。且道爲什麼。如此試舉看。

【讀方】 魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明に主賓を辨し洞かに縑素を分つ。直に當臺の明鏡掌内の明珠に似たり。漢現し胡來り、聲に彰はれ色に顯はる。且しく道へ什麼としてか此の如くなる。試みに舉す看よ。

【講義】 此垂示を古人は初めに有跡即見。二つに作家の勘檢。三つに結歸公案。と三段に分けて見て居られる様である。魚行けば水濁り鳥飛べば毛落つ。これは思い内にあれば色外に顯はると申して、少しでも心に貯へることがあれば、自然天然に其れが色にも形にも顯はれて參る。蹤跡が現在する。況んや其れが言語文句にあらはれ、伎倆手段に顯はれる様になりては。臭氣紛々として鼻持ものなるものでない。味噌の味噌臭きは上味噌に非すと申すが、禪坊の禪坊臭きは鼻持ものなるものではない。坐禪をしたからと云つて、其れが口先身振にあらはれ、鼻に掛かり目にブラ下るやうでは。側に居る人がたまつたものでない。へドを吐くはへドを。其の様子を魚行けば

水濁り鳥飛べば毛落つと申したのである。そこで若し之れを明眼の衲僧に勘檢させることになる
と、明かに主賓を辨じ洞かに縑素を分つ。主と賓、真と偽、縑と素、邪と正、黒と白と、其の辨別を明
かにつけて、洞かに徹見する有り様は、直に當臺の明鏡掌内の明珠に似て漢現し胡來り聲に彰は
れ色に顯はるで、恰も臺に當れる明鏡には、漢人が來れば漢人を映し、胡人が來れば胡人を現して
美となく醜となく、大となく小となく、一切皆公平無私に映現して更にのがす處がないが如く。又
掌内の明珠には、口を開けば其の儘の姿がうつり、顔をしかむれば梅干顔が現するが様に、聲色現
前の上で心肝五臟のこすところなく徹見して邪正善惡を辨別し、眞偽黒白を分別するからして、知
識面前に立つた上は一點の私も出来るものではないのである。そこを佛にあつては大圓鏡智と申
し閻魔王にあつては淨玻璃の鏡と云ふのであつて、要する所は心機の在る處如何に隠しても隠し
おしせるものでないと云ふのである。然らばそは如何なるわけでさう云ふことであるかと云ふに
其の例證として好い古則があるから參究して見よと云ふので、且らく道へ什麼としてか此の如く
なる試みに擧す看よと公案に結歸した。

第二節 本則

擧僧問大隋劫火洞然大千俱壞未審這箇壞不壞這箇是什麼物。這一句天下衲僧摸索不着。預攝待

痒。隋云。壞無孔鉄鎚當面擲。沒却鼻。僧云。恁麼則隨他去也沒量大人悟脈裏 隋
云。隨他去前箭猶輕後箭深。只道箇多少人摸索不着。水長船高泥多。

【讀義】擧す。僧大隋に問ふ劫火洞然として大千俱に壞す。未だ審かし這箇壞か不壞か。這箇は
れ什麼物ぞ。道の一句天下の衲僧も摸索不着預め攝いて痒を待つ。隋云く壞。無孔の鐵鎚當面に擲つ。鼻孔を沒却
す。未だ口を開かざる以前に劫破了也。僧云く恁麼ならば他に隨ひ去や。沒量の大人も語脈裡に轉却せらる。果然
として錯つて認む。隋云く。他に隨ひ去る。前箭は猶ほ輕く後箭は深し。只道箇多少人摸索不着。水長ければ船高
く泥多ければ佛大なり。若し他に隨ひ去ると道は什麼の處にか在る。若し他に隨ひ去らずと云は又作麼生。便ち打す。

【中解】一。劫火洞然として大千俱に壞す。此語は仁王護國般若波羅蜜多經の護國品第五に出づる偈文で。具さに掲
ぐれば、劫火洞然として大千俱に壞す。須彌巨海磨滅して餘なく。梵釋天龍もろくの有情も尙ほ皆殄滅す。何に泥ん
や此身をや」と云ふのである。此則は大隋錄の上堂に見へて居る。劫火は劫は梵語の劫波で茲に長時と翻する即ち長い時
間と云ふことである。世界の最初成立する間を成劫と云ひ、已に成立した上には暫らく保存せられる其間を住劫と云ひ、それ
が又常住と云ふわけには參らず、追々破壞せられる時節がある其れを壞劫と申し。その壞れる順序に火災と風災と水災とが
あつて、其の火災が天地萬物を悉く焼き盡してしまふ有様を劫火洞然として大千俱に壞すと申したもので。大千と云ふは、佛教
の天體成立説を申されば詳しく分からねから簡單に説明して見ると。まづ、釋迦佛の降誕遊ばした天竺は南閻浮提の正中
に當るところ。閻浮提は須彌四州と申して須彌の四面に東弗于逮など、州が四つある、其の中の一つで。須彌の南方にある
から南閻浮提と申すことである。偕須彌山の四方で日月に隣りしてある處が即ち四王天で其の上が帝釋天。其の上虚空中に
雲の如くに朗然として四重天あるのが總じて欲界で。其の上の十八天が即ち色界。其の上層に四重天あるのが無色界。此

の三つ合せた處で所謂三界となるので、其中に悉く有情即ち生物が居る。是れを一世界と名けるので、今日の言葉で申せば太陽系統に屬する諸星を一まとめにして一世界と申すのと同じことである。其れが一千世界集まつたのを大千世界と云ひ。其の大千世界を更に一千集めたのが大千世界で、其の中千世界を更に一千集めたのが大千世界で、三次千を云ふから三千大千世界即ち百億世界のことで、一口に申せば實に數へきれない程の多くの世界と云ふことである。其の數へきれない程の多くの世界が壞劫の火災の爲めに悉く洞然として焼き盡されてしまひ。次に風災が起つて其の灰をも皆吹き飛ばしてしまひ。更に水災が起つて悉く漂蕩してしまつた後を空劫と申すので、之れを成住壞空の四劫と名けて世界の生滅變化する様を説明したものである。

二。這箇壞か不壞か。茲で這箇と云ふは、廣く云へば眞如とか法性とかと申すが、狹く云へば精神とか靈魂とかと名けられるものである。即ち劫火洞然として起るの時には、靈魂や精神迄も悉く焼けてしまふものであるかどうかどうであらうと問ひかけた。

三。這箇是れ何物ぞ。這箇とは畢竟如何なるものであらう。有るものか、無ひものか。若し有る物ならば持出してごろうじ老僧が一覽しやうと云ふ。

四。這の一句天下の稱謂も模索不着。何も此僧計りではない。誰でも皆確實に之れを捉へ得られるものではあるまい。

五。預め掻いて痒を待つ。天空が落ちて來たら何んとしやうぞと云ふも一般で。所謂痴人の杞憂であるから、此の迂路たへ者め三災も未だ至らぬ中に、只端的を何故に會せぬぞと云ふ。

六。無孔の鐵鏈當面に擲つ。元來這の僧は劫火洞然として大千を壞するとき這箇は壞か不壞かと問ひかけたが。その這箇とは之れ何物ぞ。畢竟大千の成住壞空と云ふも之れ只這箇の波動の一部分にすぎないのである。然るに此の僧は大海の波動の生滅起伏するを見て、大海が滅しはせぬかと憂いだした。誠にいらぬ心配と申さればならぬ。そこで大隋和尚が一言壞と答へて鼻孔を裂破してしまはれた。之れが誠に慈悲極まつた處である。

七。鼻孔を没却す。鼻柱がヘシ折れたであらう。面目次第も無い話と所謂靈魂不滅論者を誡める。

八。未だ口を開かざる以前に勦破了也。此の圓悟は大隋が壞とも不壞とも云はれぬ中にチャンと勦破して仕舞つて居るとスマシ込む。

九。恁麼ならば他に隨ひ去る。ナセニ大千の焼するとき這箇が劫火の御伴をしてゆくのであらう。

一〇。没量の人も語脈裡に轉却せらる。大器量の人でさへ他の語句について廻るから、此の僧が狼狽するの無理もないことよ。

一一。果然として錯つて認む。サテコソ此僧壞滅と云ふ邪見に落ちて仕舞つた不慧なことであると云ふ。

一二。前箭は猶ほ軽く後箭は深し。前箭はさのみなかつたが、今度こそ骨迄射透した、痛いであらうと云ふ。

一三。只這箇の人模索不着。這箇元來壞不壞に涉らぬもの、其れが何故に壞であるか。本來自他を離れたもの、其れが何故に隨ひ去るか。この問題にかゝつては何人と雖も模索不着であらう。

一四。水長ければ船高く泥多ければ佛大なり。水次第で船は浮き上り、泥次第で佛は大きくなる。之の位明白なことはないのにこれ何故に會得が出來ぬのであらう。

一五。若し他に隨ひ去ると道はハ什麼の處にか在る。若し他に隨ひ去らずと云はハ又作麼生。壞するものか、壞せざるものか、有るものか無きものか、生ずるものか滅するものか。お互ひに審細に參究して見なければならぬ。

一六。便ち打す。ヒシツと一棒に壞不壞の兩頭を截断し來りて、諸人心配するな這箇何物ぞと云ふ。

第三節 本則提唱

僧問、大隋劫火洞然大千俱壞。未審這箇壞不壞。下語云、問、鬼窟裡作活

混沌未分の處には火と云ふものは無いぞ。天地人の三際が分つてこそ風火水の三つともなり來つたことぞ。然して三千大千世界が滅す時、風が吹き破り火が焼き拂ひ水が洗ひ流す。如此して彼は這箇は何んと破れやうか又破れまいかと問ふたぞ。這箇とは本分なり。僧も本分を少しは知りたれども、只教意をもととして是より上のことはあるまいぞと思へばこそ。此の問を起したることなれば、即ち狐狸の窟裡に入りて楽しんで居ることよ。又壞と云ふは成住壞空とて、成劫と云ふて花のつぼむ處。住劫と云ふて花の開いた處。壞劫と云ふて花の散る處、空劫と云ふて落ちて後一物を止めぬ處よ。先師下語に、問得可ニ始得一。

隋云、壞。下語云、毒氣傷人。爛泥裏有棘。舌頭有骨。

壞すと云ふた怖ろしい句中を云ふたぞ。舌頭有骨と云へは毒氣傷人と云ふ句は用いられぬぞ。

僧云、恁麼則隋他去也。下語云、隨語轉一死不再活。隨彼微。

懷とうけたるは我に隨つて仰せらるゝかと云ふ也。先師の下語に。蹉過也。不知迷己逐物。

隨云、隨他去。下語云、初心不改。觀機無改路。

僧句中を心得ず、隨他去也と云ふたを、隨他去と云ふたは。是れ句中の休まざる怖ろしい機を云ふたものぞ。先師下語に劈不開。

第四節 本則評唱和譯

大隋の法眞和尚は大安禪師に承け嗣ぐ。乃ち東川鹽亭縣の人なり。六十餘員の善知識に參見す。昔時瀉山の會裏に在つて火頭と作る。一日瀉山問ふて云く。子此に在ること數年、亦箇の問を致し來りて如何と看ることを解せず。隋云く。某甲をして箇の什麼を問はしめてか即ち得んと。瀉山云く。子使ち會せずんば如何が是れ佛と問へと。隋手を以て瀉山の口を掩ふ。山云く。汝已後箇の掃地の人を覓むるも也た無げんと。後川に歸つて棚甲山の路次に於ひて煎茶して往來を接待すること凡そ三年、後方に出世し山を開いて大隋に住す。僧あり問ふ。劫火洞然として大千俱に壞す。未だ審かし這箇壞か不壞か。這の僧只教意により來りて問ふ。教中に云く。成住壞空に三災劫起つて壞して三禪天に至ると。這の僧元來話頭の落處を知らず、且らく道へ。這箇是れ什麼ぞ。人多く情解をなして道ふ。這箇は是れ衆生の本性と。隋云く壞。僧云く恁麼ならば則ち他に隨つて去るや。隋云く他に隨つて去ると。只這箇多少の人情解して模素不着なり。若し他に隨つて去ると道は、什麼の處に在る。若し他に隨つて去らずと道は、又作麼生。道ふことを見ずや親切を得んと欲は、問を將ち來つて問ふこと莫れと。後に僧あり修山主に問ふ。劫火洞然として大千俱に壞す。未だ審かし這箇壞か不壞か。山主云く不壞。僧云く、什麼としてか不壞。主云く

大千に同じきがためなり、壞も也た人を碍塞殺し、不壞も也た人を碍塞殺す。其の僧既に大隋の説話を會せず、是れ他也た妨げず、此の事を以て念となして却つて此の間を持して直ちに舒州の投子山に往くことを。投子問ふ。近離甚の處ぞ。僧云く、西蜀の大隋。投子云く、大隋何の言句か有らん。僧遂に前話を擧す。投子香を焚いて禮拜して云く。西蜀に古佛有つて出世す。汝且らく速かに回れと。其の僧復回つて大隋に至る。隋已に遷化す。這の僧一場の懺懺。後唐の僧景遵と云ふものあり。大隋に題して云く。了然として別法なし。誰れか道ふ南能を印すと。一句他に随つて語る。千山衲僧を走らしむ、聖寒して砌葉に鳴き、鬼夜籠燈を禮す。吟じ罷む孤窓の外、徘徊恨み勝へすと。所以に雪竇後面に此の兩句を引いて頌出す。如今也た壞の會を作すことを得ず。也た不壞の會を作すことを得ず。畢竟作麼生か會せん、急に眼を着けて看よ。

【字解】一。大安禪師。福州長慶の大安禪師は百丈懷海禪師の法を嗣いだ人であつて唐の中和三年十月二十二日に入滅せられた。勅證圓智禪師と云ふが即ち師のことである。

二。火頭。油頭とも申して禪寺で燈火の點消を掌る役名である。

三。隋手を以て瀉山の口を掩ふ。エイ姦ましい聞き度もないと云ふ。

四。箇の掃地の人を覓むるも亦た無けん。餘り峻嶮な師家には家人がなづかぬものであるが、これはどこでも同じこと、見える。

五。道の僧元來話頭の落處を知らず。此僧はまた新參と見へて、禪門の落處を知らぬやうであるが然し這箇と云ふことを

知りて居ることを思へば少しは叢林に依つたこともあるであらうと云ふ。

六。這箇は是れ什麼ぞ。這箇とは之れ什麼物であらう。有るものか、無いものか。生ずるものか滅するものか。これは是非とも調べて見なければならぬ。世間の人には色々勝手の解釋をつけて、這箇は即ち衆生の本性であると云ひ、宇宙の本体であると云ひ、萬有の實體であると云ひ、或は又佛心とか那一物とかと申して居るが、然し畢竟是れ閑人の死名目。唾汁鼻しるに外ならぬのである。サア諸君、這箇とは抑も何物であらう捉へ來つて山僧に呈解して見よ。

七。道ふことを見ずや。親切を得んと欲はり。これは首山省念禪師の申された語句である。

八。修山主。修山主と云ふは地藏桂深の法を嗣がれた、撫州龍濟の紹修禪師のことである。

九。舒州投子山。投子山の大同禪師は聖微無學禪師の法を嗣いだ方で胥原下四世の法孫である。乾化四年四月六日示寂。壽九十六慈濟大師と諡號を賜つた。

一〇。了然として別法なし等。此の詩の大意は這箇大千全く別法なき處に、誰か三鼓入室して南能を印すなとらたへたことを言ふのである。本來他人に與へ得べきものでもなく、亦他人より受け得らるゝ物ではない。然るに何ぞや此僧は他に随つて去るの一句をも會得し得ずして、往きつ還りつ東奔西走日も只ならざるありさまとは。然るに幸ひ大同禪師の訓誡を受けて。大隋の有り難さを知り再び大隋山に歸つて見れば大隋古佛と云はれた人も早や遷化せられて、只聞くものとは、砌葉の邊りに蟬の唧々たる聲のみであつて誰れを師とし誰れを頼みとする方もないと、サテも悲しきことである。せめては無き老大師の塔前にもと、空しく祖塔に對して誦經禮拜すれば、孤窓のもと月のみ朗々と照り透りて寒月いと物すこいことである。

第五節 類則提唱

其一 大隋飯頭

一日瀧山問云。子在此數年。亦不解致。箇問。來看如何。隋云。令某甲問。箇什麼。即得。瀧山云。子便不會問。如何是佛。隋以手掩。瀧山口。下語云。上無攀仰。下絕已躬。

如何是佛と問へと瀧山の云はれた處を掃絶して口を掩ふたぞ。佛など云ふものが何處に有らうぞ。上に問ふべき佛もなく、下に問はむとする我もないぞ。又云く左様な法臭ひことをな仰せられぞと口を掩ふた處ぞ。

山云。爾已後。覓箇掃地人。也無。下語云。養子方知。慈悲。憐兒。不覺。醜。

左様に奇麗に截斷を用い切つた人をば覓むるともあるまいぞと褒美して云ふた處を、傍人から見かけてした下語ぞ。掃地とは截斷の方ぞ。

第六節 頌

劫火光中立。問端。是道什麼。已。禿僧猶滯。兩重關。坐斷此人。如何救得。百。可憐。一句隨他語。天下。納僧作。道般計較。千句萬句也。萬里區區。獨往還。業識茫茫。蹉過。草鞋。劫火光中間端を立す。什麼と道ふぞ。已に是れ錯り了れり。禿僧猶ほ滯ふる兩重の關。此人を

坐斷して如何か救ひ得ん。脚頭脚底百匝千重にして了れり。憐れむべし一句他に隨ふの語。天下の禿僧も道般の計較を作す。千句萬句も亦た消得せず。什麼の他の脚頭を截斷し難き處かあらん。萬里區々として獨り往還す。業識茫茫。蹉過するも也た知らず。自からは草鞋を踏破す。

【字解】一。什麼と道ふぞ。道箇が壞するか壞せぬかは是れ什麼とな。諸人能く聞け。餘所事ではないぞ。

二。是れ錯り了れり。最初から大間違ひで。問題にならぬと云ふ。

三。此の人を坐斷して如何か救ひ得ん。斯かる疑團に煩悶して居る人を膝下に取りひしんで豁然大悟させると云ふことは中々容易なことではない。なぜか。兩重のみではない百匝千重重々の疑團裡中に滯在して居る故に。

四。脚頭脚底百匝千匝に了れり。種々様々の疑團に疑團が重なりて身動のつかないものであるから到底救ひ得る見込みはないと云ふ。

五。天下も禿僧も道般の計較を作す。何も此僧一人に限つたことではない。天下の人だれも同様である。

六。千句萬句も也た消得せず。這の隨他去の一句には實に非常なる價值があるから、之の一句を解釋するに千句萬句を以てするも尙決して消化し得られるものでない。そこで經には百千萬劫不能窮盡と説いてある。

七。什麼の他の脚頭を截斷し難き處かあらん。エイ齒がい。此の僧には吹毛の手が無いものであるから、大隋の言句に迂踏たへたのである。然し若し我れなれば他の大隋が隨他去と云ふた時にスツメリと其の脚頭を截斷することは何も難作もないことであつたと云ふ。

八。業識茫茫。亡者共の氣の毒さ何時までも六道に輪廻することであらう。

九。蹉過するも也た知らず。アチコチと往還して居てそれを知らぬとはなまじげないことである。狼狽ではいかぬ。夫れ鼻の先きですり差ふたがと注意する。

一〇。自らは是れ草鞋を踏破す。彼方此方と東奔西走しても只徒らに草鞋を踏み破るばかりのことで、何の所詮もないであらうと云ふ。

【講義】 劫火光中間端を立つ。此の頌は七言四句の絶句體になつて居つて、實に朗々として頌すべきものである。句意の大體は此の僧劫火光中に問端を立て、這箇が壊るか壊せぬかなと尋ねて來たけれども。衲僧猶ほ兩重の關に滯る。惜しいかな壊と不壊との兩關所に滯つて居るものであるから折角ながら了得することが出來ぬ。然しこのことに就いては穴勝ちに此僧計りを咎がめるわけにもゆかぬので大概の衲僧は皆なほ滯つて居るが如何にも氣の毒なことである。と坐下を見廻して、何んと諸人即今諸人の頭上、劫火光中三災共に至つた時であるにそれをウツかりして居るとは何事である。ウロリとして居らば喪身失命であるぞ。人人箇々頭燃をはらふが如くに參究せねばならぬと婆心を加へられたものである。憐れむべし一句他に隨ふの語、萬里區々として獨り往還す。此僧は其の後に大隋の隨他去と答へられた語に、愈々疑團を増して、舒州投子山の大同禪師の處へ往つて、此の問答の顛末を話し大隋が壊と答へ亦他に隨ひ去ると云はれた様子を委しく申した處が、大同禪師はそれを聞いて非常に喜ばれて香を焚いて大隋の方を拜禮して、西蜀に古佛が出世せられた。然るに足下は此の老古佛の膝下に在りながら、何故に古佛をすて、此處へ來られたのか。早く大隋の處へ歸つて一大事を參究せられよと誠められた。そこで此僧も始め

て大隋の有り難さを知つて、急いで大隋の處へ歸つて來た處が、何ぞ圖らん法眞禪師は早や入滅せられた後のことで。再び參究することが出來なかつたと云ふことである。此因縁は前節の本則評唱の下にも出てあるから見なをして見るが宜しい。そこで雪竇は此の故事を引いて何んと諸人此の僧が只此事を決せん爲めに西蜀から舒州に、舒州から西蜀に往きつ還りつ奔走せられたは、如何にも殊勝なことである。然るに今時の學者は會する底のものゝないのは勿論のこと、その上にまた此僧のやうに眞實に此の事の參究に志す者もないやうであるが誠に痛ましいことであると雪竇の爲人獎勵せられたものである。

第七節 頌評唱和譯

雪竇機に當つて頌出す。句裏出身の處あり。劫火光中間端を立す、衲僧猶ほ兩重の關に滯る。這の僧の問處、先づ壊と不壊とをいさぐ。是れ兩重の關なり。若し是れ得る底の人ならば壊と云ふも也た出身の處あり。不壊と道ふも也た出身の處あらん。憐むべし一句他に隨ふの語、萬里區々として獨り往還す。這の僧此れを持して投子に問ひ、又復大隋に回ることを頌す。謂ふべし萬里區々たりと。

【字解】 一。機に當つて頌出す。諸人の機に應じて頌出すとのこと。

二。區々として。區々は勤勞の貌。セツセと力を出してと云ふ程のこと。

第三十則 趙州大蘿蔔頭

第一節 本則

舉僧問趙州。承聞和尚親見南泉。是否。千聞不如一見。見。州云。鎮州出大蘿蔔頭。

【讀方】 舉。僧趙州に問ふ、承はり聞く和尚親しく南泉に見ゆ。是なりや否や。千聞は一見に如かず。抄。肩毛八字に分る。州云く。鎮州に大蘿蔔頭を出だす。天を撐へ地を拄ふ。斬釘截鐵。箭新羅を過ぐ。腦後に腮を見る。與に往來すること莫れ。

- 【字解】 一。千聞は一見に如かず。千萬度聞いたよりも、一目見た方が確かであると云ふ。
- 二。抄。趙州を勘檢するには適當な抄しぶり。好い目のつけ處である。
- 三。肩は八字に分る。眼横縦鼻趙州も南泉も同じ人間である筈。別に變つたこともなからう。
- 四。鎮州に大蘿蔔頭を出す。大蘿蔔頭は日本の大根のことである。鎮州は大根の名産地と見へる。尼張から大きな大根が出ますよ。天王寺から立派な蕪が出ますよと云ふも同じことである。
- 五。天を撐へ地を拄ふ。いや恐ろしい大きな大根で天地の間に塞がるぞと云ふ按梅。之れでは趙州も南泉も居場所がないわけであるが、サテ持てるかなと云ふ。
- 六。斬釘截鐵。なんと見事な。正宗の銘刀の切れ味がしてソツトする計りであると云ふ。
- 七。箭新羅を過ぐ。答話の落處は如何。諸人行き先きは分るまい。

八。膺後に眼を見る與に往來すること莫れ。サテ趙州のやうな悪相な男とは道連にならぬ方が宜しい。ウツカリと寄り附く如何なる災難にあふかも知れぬからと注意する。

第二節 本則提唱

僧問^ツ趙州^ニ承^リ開^ク和尚^ヲ親^ク見^ル南泉^ニ是^レ否^ヤ。下語云。句裡^ニ呈^シ機^ヲ劈^テ面^ニ來^ル。

州の南泉の弟子ちやと云ふことを好く知つて賊の方から問ふたなり。先師下語に人^ニ來^リ得^ル虎鬚^ヲ要^ス打^テ草^ヲ見^テ蛇^ヲ。

州云。鎮州出^ス大羅^ヲ葡萄^ヲ頭^ヲ。下語云。深^ク辨^ス來^ル風^ヲ。

句中を勘破して初問に取り合はず答へたなり。鎮州は大根の名處なり。鎮州より大根を出すことは誰も知り居る如く、州の南泉の弟子ちやとは誰も好く知ることよと句中を勘辨して云へり。先師下語に提^ト不^ト起^ス。白雲覆^フ青山^ヲ。先師云く。別に下語あり。下語に云く、大火聚裡^ニ弄^ス毛塵^ヲ。是れは三句の體具はるなり。面は色相ぞ。色相と見れば截斷が備はるなり。截斷と云ふも本分の上なり。又大火聚の裡に毛塵を弄すと云ふは句中なり。火の裡に毛が弄せられたやうな事があつてこそ。この僧コワ者で、和尚親しく南泉に見ゆるは不審なことぢや。本分の上に別なることがあらうか。又天下に趙州の南泉に見みへらるゝことは知らぬ者は御坐るまいと云ふ心ではなりや否や

と問ふたを。纏^マがて趙州の心得て、それには取り合はず鎮州に大羅葡萄頭を出す^ト答へられたは、句中も備つたぞ。

第三節 本則評唱和譯

この僧也た是れ箇の久參底。問中妨げず眼有り爭奈。趙州は是れ作家。便ち他に答へて道ふ。鎮州に大羅葡萄頭を出す^ト。謂つべし、無味の談人口を塞斷すと。この老漢大に箇の白拈賊に似て相似たり。爾纒かに口を開かば便ち爾が眼睛を換却す。若是れ特達英靈底の漢ならば、直下に擊石火裏閃電光中に向つて、纒かに舉着するを聞いて剔起して便ち打せん。苟し或は佇思停機せば、免れず喪身失命することを。江西の澄散聖、判して之れを東問西答と謂ふ。喚んで答語せず他の圈纒に上らずと作す。若し恁麼に會せば爭か得ん。遠錄公云く、此れは是れ傍警の語、九帶の中に收在すと。若し恁麼に會せば夢にも也た未だ夢見せざることあらん。更に趙州を帶累し去る。有る者は道ふ。鎮州從來大羅葡萄頭を出すは天下の人皆知る。趙州從來南泉に參見す。天下の人皆知る。この僧却つて更に問ふて道ふ。承はり聞く和尚親しく南泉に見ゆと是なりや否やと。所以に州他に向つて道ふ。鎮州に大羅葡萄頭を出す^ト。且得沒交涉。都べて恁麼に會せず、畢竟作麼生が會せん。他家に自ら通霄の路あり、見ずや僧九峯に問ふ、承はり聞く和尚親しく延壽

に見みえ來ると是なりや否や。峯云く、山前の麥熟するや也。未だしやと。正に趙州此の僧に答ふる話に對得す。渾て兩箇無孔の鐵鎚に似たり。趙州老漢是れ箇の無事底の人。備輕々に問答すれば便ち備が眼睛を換却す。若し是れ有ることを知る底の人ならば、細に嚼み來つて嚙まん。若し是れ有ることを知らざる底の人ならば、一へに渾崙に箇の棗を呑むに似ん。

【字解】一。趙州。趙州は有名な趙州觀音院の從諱禪師で法を南泉普願禪師に嗣いだ方であつて唐の乾寧四年十一月二日に右脇にして示寂せられた。壽一百廿歳。眞際大師と諡を賜つた。

二。備緩かに口を開かば便ち備が眼睛を換却す。備が若し云はんと疑すれば早や目玉をくりかへらるゝぞと云ふのである。

三。江西の澄散聖。勸潭の靈澄禪師は嶽州巴陵の新開觀聖大師の法嗣で雲門大師の孫である。散聖は感化の賢聖と申して師の印證なくして而も得悟自然放曠自在なる人の謂で。例せば保誌とか寒山とか云ふ人がそれである。

四。直下に擊石火裡閃電光中に向つて。分別計度に涉たらず、思慮言舌によらず、總かに擧着するを聞いて電光石火裡に會得すると云ふことで別起は別は解なりで會得し合點することである。

五。東問西答。東を問へば西と答へ、南を問へば北と答ふる底のことである。僧あり云く、お前さまはお父さまの子と承りましたが本統に左様ですか。ハイ尾張から大根が出ます。

六。喚んで答話せず他の圍繞によらずと爲す。所問に取り合はずに句中を勘破して、空言を答へたものである。皆さん大羅葡頭に鹽をつけてかぢつてころうじ食へるものか食へぬものかと云ふ。

七。遺錄公。舒州浮山の圓鑑法遠禪師は葉縣歸省の嗣で臨濟下七世の法孫である。其の能く吏事に通ずるの故を以て時人稱して遺錄公と喚んだ。其の著書として有名な佛禪宗教義九帶集百卷は平常門下に示された宗門の語句を類

集したもので、次の九門に分れてある。(一)佛正法眼帶。(二)佛法藏帶。(三)理貫帶。(四)事貫帶。(五)理事縱橫帶。(六)金針雙鎖帶。(七)平懷常貫帶。(八)屈曲垂帶。(九)妙叶兼帶。九帶と名けたのは、このためである。

八。此れは是れ傍賢の語。傍賢はチヨット側目に見る親で、古人は傍は猶ほ邊側の如し正處に在らずして譬一句語を謂ふと解して居られるのである。鎮州の近傍であつたから、フト見當つた儘に鎮州に大羅葡頭を出すと申したものでちやと云ふのである。

九。他家に自から通霄の路あり。霄は雲氣なりと申して虹のことである。某には某の上天の道があつて雲上にも通ずることが出来るが、これは某の獨占である。人々各自如何なる方々もあるであらうと云ふ。

一〇。九峰延壽。九峰は、廬山歸宗寺第十二世の道詮禪師で延壽寺慧輪禪師の法を嗣いだ方であつて、宋の太祖の開寶五年に洪州の帥林仁肇の請に應じて筠陽九峰の隆濟院に住して宗乘を擧揚せられた。雍熙二年十一月廿八日示寂、壽は五十六歳であつた。延壽は即ち延壽寺の慧輪大師と申した人で保福從展禪師の法嗣であるから雪峰の孫に當つて青原下七世の大徳である。

一一。若し之れ有ることを知る底の人ならば細かに嚼み來つて嚙まん。若し是れ有ることを知らざる底の人であれば少しも喉に碍はらずに能く嚼みなされることであらう。

一二。一へに渾崙に箇の棗を呑むに似ん。恰も棗を呑むが如く丸呑みにしては酸いも甘いもわかるものでない云ふ。

第四節 類則提唱

其一 九峰麥

僧問三九峰承聞和尚親見延壽來是否峰云山前麥熟也未。下語云。

動破了也。深辨來風。

本則の趣きと同じきなり。又云く。九峰は延壽のためには弟子なれば、見みえたことは勿論のことぢやに、此僧が句中に此の如く問ふた程に、一向それに取り合はず、門前の麥熟するや未だしやと云ふたは、何の道理もないことを云ふて事ありそうに答へた處が問答に相應して問ふを勘辨したと云ふ心なり。此れ本則の大羅荷頭の古則と同意なる故此處に引くなり。

第五節 頌

鎮州出大羅荷。天下人知。切忌道着。天下衲僧取則。用此閑言長語。只知自古

自今。也。不開半合。如麻似粟。自古爭辨。鶴白鳥黑。全機顯脫。長者自長。短者自短。辨者自賊。賊更

不是則。自是衲僧鼻孔曾拈得。穿過了也。裂轉了也。

【讀方】鎮州に大羅荷を出だす。天下の人知る。切に忌む道着すること。一回擧着すれば一回新なり。天下の衲僧則を取る。争奈せん不憚なるを。誰か此の閑言長語を用ゐん。只自古と自今とを知て、半開半合。麻の如く粟に似たり。自古も也た不憚如今も也た不憚。争でか辨せん鶴は白く鳥は黒きことを。全機顯脫す。長者は自ら長く短者は自ら短し。識得する者は實し。也た辨することを消得せず。賊々。唯。更に是れ別ならず。自らは是れ擔枷過狀。衲僧の鼻孔曾拈得す。穿過了也。裂轉了也。

【字解】一。天下の人知る。三尺の兒童と雖も鎮州は大根の名所である位のこととは知つて居るから、何も雪竇がこと新しく申されるにも及ぶまいと云ふ。
二。切に忌む道着すること。本來成佛などは誰しも知つたことである。お互ひに面白いからとて雪竇や趙州の口眞似をしてはなりませんぞ。
三。一回擧着すれば一回新なり。先程も趙州から承つたが今亦雪竇から承つた。聞く度び毎に新しく聞く度び毎に面白う御座ると云ふ。
四。争奈をん不憚なるを。何程似せても手本には似まい。虎を畫くに猫を畫くなよ。
五。誰か此の閑言長語を用ゐん。鎮州だの大根だのと。誰れがそんなものを手本などにするものか。圓悟は聞くもいやで御座りますと云ふ。
六。半開半合。雪竇只知るとは云はるゝか。知つた様でもなく知らぬ様でもなく。ドツチつかずの言ひ分である。
七。麻の如く粟に似たり。今も古も同じこと。半知半解の似せ者計りが多くて眞實辨得底の者のないのは嘆しいことである。
八。自古も也た不憚如今も也た不憚。今も昔も本統に知り得るものはないもので、猿が冠をかむつた様なもの計りであると云ふ。
九。全機顯脫す。これは鶴は白い鳥は黒いと云ふ一語で以て、能く宇宙萬象の全機が明白々に露現して居るぞと稱揚する。
一〇。長者は自ら長く短者は自ら短し。山青水綠柳綠花紅長い者は長くて短いは短いと云ふのが何の辨じ難いことであらう。
一一。識得するものは實し、然し眞實に鶴白鳥黒、山青水綠の道理を識得したならば頭々貴く物々親しくして全く趙州九峰に同じだと申すもの實に貴いことであるからお互いに怠らずに參得せればならぬ。

- 一一。也た辨することを消得せず。雪竇餘リクドイ。何も其のやうなことを辨する必要はない。
- 一二。咄。ハハ、見て取つた。其の賊々と睡ぐ雪竇こそ賊であるぞと云ふ。
- 一三。更には是れ別ならず。趙州も雪竇も同じ賊仲間。同一穴の狸であるぞと云ふ。
- 一四。自らは是れ擔枷過狀。雪竇は自分と自分で白状して賊々と睡ぎ出したのであると云ふ。
- 一五。穿過了也。その賊が拈得した衲僧の鼻孔に繩を穿過して逃がさぬ様にするが好いと申して、お互ひに鼻を透されぬやうにせればならぬと注意する。
- 一七。裂轉。夫れ鼻づら繩を以て鼻のらぎのれる程れぢまげられ引きすりまはされたと云ふて、これでも未だ覺へぬのかと云ふ。

【講義】 鎮州に大羅衛を出だす。これは趙州の答話を直に拈し來つたものである。尾張に大根が出ます、天王寺に蕪が出ますと云ふことは、これ古來の定説でありて天下の人何人も雖も承知して居ることであるが。偕此の間答は何も南泉と趙州との間のみでは無い。一僧と九峰との間のみではない。彌陀と世自在王佛との間、金剛薩埵と毘盧舍即如來との間、迦葉と釋迦との間、春風と落花との間、秋雨と紅葉との間に於ても夫れ夫れ行はれて居るので此れが即ち佛心印傳燈瀉瓶の姿である。天下の衲僧則を取る。此の鎮州に大羅衛を出すと云ふ答話は、實に出格の名言であり古今の極則であるに依つて、天下の衲僧たちが皆之れを則手本として、參禪辨道の極則とすることである。只自古と自今とを知つて争でか鶴は白く烏は黒きを辨せん。然し古往今來誰も彼も此の公案は宗門の極則であると心得、古は斯様く今は然かくと一通り心得て居るけれども、

然もそれは一應知つて居る計りのことで更に其の何故に此れが極則であるぞと云ふ玄旨に至つては、たとへば鶴は白く烏は黒いと云ふことは誰知らぬものもないことながら其れが何故に白いぞ何故に黒いぞと云ふことの分らないのと同じやうに、極則の極則たるの所以を知つて居るものは至つて稀である。皆さん何故に火は熱くて水は冷たいか。砂糖は甘くて芥子は辛いと云ふことが分つて居りますか。自古も也た不恁麼自今も也た不恁麼とは實に苦々しいことである。長い者は長い短いものは短い。これは當り前のことで何の辨じ難いことがあらう。甘い辛いとは本來の性質、人々箇々本來恁麼の性質ぞと參究して見なければならぬ。賊々。俄かに賊賊とよばりたてる、それ賊人が來た。人々性根玉を取られぬやうにせよと注意して、諸人、誰が賊であらう。三世の諸佛が賊であらうか。歴代の祖師が賊であらうか。趙州が賊であらうか九峰が賊であらうか。但しは雪竇が賊であらうか。衲僧鼻孔曾つて拈得す。そは兎に角何れにせよ、鎮州に大羅衛を出だす一言下に天下幾萬の衲僧をして面目なからしめた大賊は實に古今無類で佛祖をして後へに瞪若せしめた趙州其の人であるから。お互ひに鼻孔をひつたくられぬやう目玉を入れかへられぬやう。目先きに氣を注げ脚跟下に氣を着けねばなりません。

第六節 頌評唱和譯

鎮州に大蘿蔔を出だす、爾若し他を取つて極則となさば、早く是れ錯り了れり。古人手を把つて高山に上す。未だ免れず傍觀者の晒ふことを。人皆這箇は是れ極則の話と道ふことを知つて、却つて畢竟して極則の處を知らず、所以に雪竇道く、天下の衲僧則を取ると。只知る自古自今、争かでか辨せん鶴は白く烏は黒きことを。今人も也た恁麼に答へ、古人も也た恁麼に答ふることを。知ると雖も、何ぞ曾つて緇素を分ち得來らん。雪竇道く、也た須らく是れ他の石火電光の中に去つて、其の鶴は白く烏は黒きことを辨じて始めて得べし。公案此に到つて頌了れり。雪竇自ら意を出して、活潑々處に向つて更に爾に向つて道ふ、賊々。衲僧の鼻孔曾つて拈得すと。三世の諸佛も也た是れ賊。歷代の祖師も也た是れ賊。善能く賊と作つて人の眼睛を換へて手脚を犯さるるとは獨り趙州に許す。且らく道へ什麼の處が是れ趙州善く賊となる處。鎮州に大蘿蔔頭を出す。【字解】一、古人手を把つて等。折角趙州が此の僧の手を取つて高山に引き上げられたけれども、殘念なことには此の僧は生來近眼であるから、とても遠い鎮州などが見へる筈はない。然し音に聞ゆる大賊であるから、サツカリ油断でもして居らうものなら、何時眼をスリカヘルかも知れんから、此れは此の僧に限らず、お互ひに餘程注意をしなければならぬ。二、雪竇自ら意を出して等。雪竇和尚は誠に慈悲心の深い人であるから、此の僧がリツカリして居つて、趙州に眼玉をスリカへらるゝのも知らずに居るのを憐んで大聲にソレ賊である賊であるぞと叫んで、必らず眼玉をスリカへられぬやうにせよ鼻孔を扭ち上げられぬやうにせよと注意をしてやられたが、然し此の僧は生來少し耳が遠い様であるから、折角の注意も其の甲斐がないかも知れぬと云ふ。皆さん、お互ひによく耳の穴をさちへて雪竇が慈悲を無にせんやうにしなければなりません。

大正二年二月二十日印
大正二年二月廿五日發

行 刷

定價金一圓五十錢
郵税金十貳錢

編輯者 系子 淡庄

發行者 東京巢鴨町二ノ三五 原 子 廣 室

印刷者 東京本所區番場町四番地 守 岡 功

印刷所 東京本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社分工場



發行所

東京巢鴨町二ノ三五
振替東京三二二二番

無 我 山 房

新版

正法眼藏註解全書

全十冊

クロース綴
金十五圓
各冊一圓五十錢
各冊郵税十錢

神保如天 安藤文英共編 順次發行

正法眼藏は佛教中の佛敎、禪書中の禪書である、如來一代の精神と祖師嫡傳の妙旨とは活潑して道裡に在る、本書は道元禪師入宋得髓「四來の祖道我東に傳ふ」の大白覺を以て、三十年間晝夜心血を凝いで、人類に示誨せられたる大なる又字である、九十五卷の言々句々みな禪師の血であり涙である、否、世尊の椀皮肉であり、達磨の活骨髄である、禪師の宗風は日と共、天の勢を以て今日に到り、百萬の心魂を支配して、東洋佛教の覇者と認められて居る、其の源泉は實に本書である、數多ある祖師自撰の聖敎中、爾かく後世に其の大感荷を及ぼせるは恐らく本書の右に出づる者は有るまい、單に曹洞禪と云はず、道元禪師の宗風と云はず、然れども惜むべし、「正法眼藏」は意深く語易からず、古來難解難入の書として、専門の學者も是れが講解に餘り、動もすれば之を抛たんとする、誠に慨すべき限りである、殊に、古來の碩學が其の宗旨を演説せんむの、是れが註疏を施せる者二十種に餘る、然れどもこれ等は成な宗乘専門の學者が秘藏して門外不出、未だ我等の前に提供してくれぬ、偶、其の二三本は坊間の書肆より刊行するあるも、或は湮滅し或は絶本と成つてゐるのに、是亦再版すら企て無い、ために、此の大寶典は宗内にすら一般に流布せられずして、徒らに二三好事學者の書架を飾るに過ぎぬ、これ實に、實に、千年の恨事萬代の遺憾では無いか。

編者は宗學研鑽に従事すること、茲に數年間、夙に眼藏の領得を以て一生の誓願とするもの、敎界のためこの遺憾を感ずると一層痛切である、故に數年間は、苦心焦慮、本書に關する古德の註、解、疏、論、說の總てを收攬して、「正法眼藏」を講讀し、參究せんに、僅かに此の書一本を有すること、即ちこの書で體することの出来る、最も完備せるものを敎界讀書子の前に提供せんとして、編修したる者、即ちこの書である、従つて、この書は謂ゆるの註解書全集では無い、本文の各段に、一々順序よく諸家の註解を挿入し、語義出據に關する凡ての疏釋は、これを各各の卷末に具へ、諸本の異同は悉く校合して之を臚頭に掲げてある、能ふるだけの便宜と、出來得る限りの簡潔とを盡して、編者が有ゆる親切なこの書に提げた積りである。

無我山房

二版

人々の死

全一冊
假裝美本
金五十錢
郵税八錢

曉 鳥敏 著

死は人間に對する最も強き權威である。死ぬ時には、どんな氣持ちがするだらう。安心して死なれる道がないか。本書は死の幕を開いて、そのあちらに樂邦を眺めた人のいろ／＼を書いたものである。死にともない人、死ぬのが恐ろしい人は是非本書を読んでください。

佐々木 安心座談 金六錢 郵税二錢

曉鳥敏 惠空語錄 金八十錢 郵税八錢

中島 異安心史 金七十錢 郵税八錢

多田 歎異鈔講話 金四十五錢 郵税六錢

清澤 修養時感 金三十五錢 郵税四錢

無我山房 眞宗辭典 近刊

無我山房

大谷大學教授 佐々木月樵著

新版

支那淨土教史

全二冊

クロース綴
上卷一圓五十錢
下卷一圓五十錢
郵税各十二錢

淨土教の研究は、實際的宗教として全佛敎の研究也。本書は、先づその時代に於ける佛敎及びその他種々の思潮の大勢を尋ね、常にそれを歴史上の背景として、最も忠實に支那二千餘年間に於ける所の淨土教の支那佛敎の歴史を最も深く研究したるもの也。されば、東西兩洋の學者は何れも皆な眼を支那佛敎の研究に注ぎ、最近には現時敎界の問題となつて、東洋の學者は勿論、其他西方淨土の意義を如何にも深く研究する者も、支那淨土教の源流を究むるのみならず、其の相違問題を果して然らば、本淨土の意義を如何にも深く研究する者も、支那淨土教の源流を究むるのみならず、其の相違問題を果して然らば、親鸞聖人の判例とも名づくべし。

清澤佛敎講話 郵税四十錢

多田鼎正信偈講話 郵税五十錢

佐々木親鸞傳叢書 郵税五十錢

曉島敏歎異鈔講話 郵税七十錢

南條和譯無量壽經 郵税八十錢

望月選擇集講話 近刊

無我山房

二版

釋尊の生涯及其教理

全一冊

クロース綴
金一圓七十錢
郵税十二錢

リス、デ井ス博士著 赤沼智善譯

「警世」評して曰く。本書は彼の有名なるデキス博士の原著の最新版を譯したるものにして、且つ其新著「初期佛敎」を譯して附録とせり。原著書は梵語聖典より尙古き南方佛敎の巴利語聖典を根據として編述せる最古最眞の釋尊傳にして、近時出版の釋尊傳は大抵此書の恩恵を蒙らざるはなく、既に廿餘版を重ねしを見るも本書の如何に價値あるかを知らざるを得ず。附録「初期佛敎」は釋尊當時の宗敎、習慣、社會の風俗言語を録したる時代史にして、本篇と對照して得る所少なからず。我等は斯る高著を譯出したる譯者の効勞を多とす。苟も原始的釋尊の正傳を探り、最古佛典に現はれたる佛敎の理の一斑を知り、且つ釋尊當時の時代を會得せんとする者は三讀を要す。

多田鼎佛涅槃篇 郵税八十錢

佐々木親鸞聖人傳 郵税五十錢

柏原禿香樹院語錄 郵税七十錢

白隱師遠羅天釜 郵税十五錢

浩々洞親鸞御傳鈔講話 郵税七十錢

龍田造偉人の言行 郵税六十錢

無我山房

山邊習學著

新版 佛弟子傳

全一冊 クロース綴
金一圓五十錢
郵稅十二錢

佛弟子傳は先人未著手の大事業である。其事蹟は宏大なる東西佛典の各所に埋没してゐて人をして容易に手を下さしめなかつた。著者は之が爲に滿五年の星霜を重ねて苦心に討尋し敬虔に謹暴して、こゝに佛阿彌陀經の十六羅漢の詳傳に加へて尙ほ十數人の詳傳あり、釋尊を中心として是等偉大なる宗教的人格が如何に當時の社會に飛躍してなつたか、如何に修道を續けて各自獨特の大人格を發揮しつゝ、而も和合してなつたか、是實に近く現代の宗教界を覺醒させることが多うであらう。智慧第一の舍利弗、神通第一の目連、頭陀第一の大迦葉、持法第一の富樓那、密行第一の羅睺羅、多聞第一の阿難、獅子吼第一の實頭、能化神遊の周利半迦葉、持法第一の富樓那、密行第一の羅睺羅、多聞第一の阿難、獅子吼第一の殊に偉大なる提婆が堂々として大聖釋尊に反抗せる活劇は、花の如き佳人を獻つて道に入りし者、而して是等全體が大聖釋尊の人格の内容である。正に埋没せんとせし三千年前の聖者の一群は、著者の靈腕を過して再び現代に蘇つた。誠に絶對の偉蹟である。

清澤之精神主義 金三十錢 郵稅四錢

赤沼善七里老師語錄 金五十錢 郵稅六錢

曉島敏佛教入門 金二十錢 郵稅四錢

多田鼎親鸞聖人 金五十錢 郵稅八錢

佐々木樵秀存語錄 金六十錢 郵稅六錢

隈部略文類講義 近刊

無我山房

浩々洞編

二版 佛教辭典

全一冊 特製二圓五十錢
并製金二圓
郵稅十二錢

佛教本典の要語各宗教義の術語は勿論、國史國文等を始めとして苟も佛教に關する所のものは、梵漢和に亘りて殆んど之を網羅し盡したり、その解釋の引締まりて簡明平易なること、世間讀書家の一日も座右に缺く可からざることは、佛敎界の『言海』として宗教家、教育家、その他各方面の學者の推獎する所となれり。敢て一般讀書家に謹告す。

佐々木樵 救濟觀 金廿五錢 郵稅四錢

曉島敏吾人の宗教 金三十錢 郵稅四錢

浩々洞編 清澤先生の信念 金五錢 郵稅貳錢

安藤一染香錄 金七十錢 郵稅八錢

赤沼邊 教行信證講義 四圓五十錢 郵稅二十錢

柏原義三帖和讚講義 近刊

無我山房

來馬琢道著

二月發行

新版

大智
禪師

偈頌講話

全一冊
クロース綴
金一圓七十錢
郵税十二錢

大智禪師は日本禪門唯一の詩宗にして其婉麗なる文字と超絶せる思想とは發して廿八字となり、遂に「偈頌」一卷を成せり、故に古來之が註解等を施したる人少からざるも、或は絶版となりて求めざるものあり、或は解釋簡單にして要領を得難きあり、世の禪偈に鼎を染め妙頌に範を求めんとする者齊しく之を嘆せざる無し、今や著者數年間親しく之を提唱し、之を筆録して更に校訂を加へ本書を刊行するに至れり、且つ塵世の垢を禪詩界の好指針參禪者之の好伴に校訂を加へ本書を刊し、詩に遊び、且つ塵世の垢を禪詩界の好指針參禪者之の好伴に校訂を加へ本書を刊し、禪風を謳歌せる禪師大智の高調に接せよ、

安藤清澤先生 信仰坐談 金卅五錢 郵税四錢

曉鳥敏求 道錄 金三十錢 郵税四錢

本多陽高 僧逸傳 金廿四錢 郵税四錢

金子讚 仰錄 金貳十錢 郵税四錢

多田鼎大 聖尊釋 金八錢 郵税二錢

浩々洞 信仰五部書 金四十錢 郵税四錢

無我山房

釋宗演 日置默仙序 來馬琢道編

八版

禪宗聖典

特製九十錢
特製一圓十錢
極上一圓三十錢
郵税各八錢

禪宗の經典祖錄百餘種を網羅し、和訓し、振假名を附し、誰にでも讀み得る本邦未曾有の寶典、編者十數年の蘊蓄を傾けて今や世に出づ、禪を知り禪に參せんとする者は先づ本書より入れ。

浩々洞 眞宗聖典 (特并七) 十錢 圓錢 (極一) 圓廿錢

加藤學 簡易眞宗聖教 金十二圓 郵税十二錢

柴田日蓮 宗聖典 (特并九) 三十錢 圓錢 (極一) 圓四十錢

望月淨土 宗聖典 (特并一) 圓四十錢 圓六十錢 (極一) 圓六十錢

無我山房 禪宗辭典 近刊

長松眞言 宗聖典 近刊

無我山房

每月一回發行

精神界

第一部 三十五號
一年一圓七十錢
郵稅不要

人各々不平ありこれあるに依りて人は酒に溺れ色に迷ひ金色夜叉となり社會主義となる。國家の危き社會の不幸之れに過ぎたるはなからん。佛陀の大道場なり。靈的平安の道を啓きて萬民を導き給ふ。精神界はこの佛陀のおのく道場なり。人生に疲るゝものは來れ。精神界は親の家也。慈悲の問題をかざりて全世は來れ。精神界は極樂の門也。靈光の衣に身を清め。慈悲の花をかざりて全世の兄弟と手を握り樂地に入らんとする勇者の姿を精神界に見すや。

毎月一回發行

家庭講話

第一部 八十五號
一年四十五錢
郵稅不要

家庭は信心獲の道場である。本誌は此の考の上立ちて發刊せられたり。本領欄には家庭の意味あひを語り。二講話欄には大家諸師の有難き法話講演を掲げ。三家庭欄には、家庭に於ける日常生活の事柄に關して、信仰的解釋を與へ。四思藻欄には、清新にして有益なる佛教家庭にふさはしき小説、和歌、新體詩等を載せ。五雜俎には聖賢の逸話、賢女妙好人の傳記等を集めて新奇なる各方面の出來事を報導す。其他信仰、處世、古事等の質疑は求めに應じて懇切に應答する斯くて本誌は現代に於ける唯一の佛教家庭雜誌であり升。

無我山房

終